札幌市文化部 御中

ACF札幌芸術・文化フォーラム
運営代表 竹村 泰子

(仮称) 市民交流複合施設基本計画 (案) に対するACFからの提言

【はじめに】

ACF(札幌芸術・文化フォーラム)は、かねてより、市民主導の創造性豊かな文化・芸術の花咲く札幌をねがって、市民・文化芸術関係者・経済人の協働による活力あふれるまちづくりのあり方を、多くの方々の意見をもとに提言すべく努めてきた。

この度の、(仮称)市民交流複合施設の整備基本計画策定は、長期的・広域的にみれば、北の文化圏の中核都市としての世界的な役割を期待されている札幌において、これからの文化・芸術、そして都市機能のあり方からも、画期的な意義をもつものと受け止めている。

当初の市民交流施設検討委員会から、札幌の芸術文化を育成し、まちの魅力を高めていく施設として、ハード、ソフトの両面から議論されてきた。そして、札幌の都心に、世界に発信する芸術文化の拠点を目指してきた。これは、「創造都市」をめざす札幌の拠点施設でもある。こうした位置づけの基に、ACFとしての提言をまとめ、今後の施設整備、運営に活かしていただきたい。

具体的な提言に入る前に、市民交流複合施設は、創造都市さつぼりの理念を具現化し、新しい札幌の魅力を発信する場と考える。単なる芸術文化の拠点ではなく、ITや観光、ビジネスとも結びつける複合的な機能が求められている。しかしながら、今回のパブリックコメントの求め方をみると、それぞれの施設管轄単位となっており、総合的な視点が欠けているように見受けられる。一言付記しておく。

【基本計画の考え方について】

平成20年に策定された、「市民交流複合施設基本計画(以下基本計画と呼ぶ)」を更にさまざまな検討を加えて、今回平成25年策定された「市民交流複合施設整備基本計画(以下整備基本計画と呼ぶ)」へ改定されたものとして提言を整理したい。

【整備目標・方針・基本機能等についての提言の考え方】(6P～11P)

「基本計画」に書かれていた「市民交流複合施設の役割」については、改定されても引き継がれているものと理解したいが、その内容が記されていないため改めて指摘しておきたい。

「市民交流複合施設の役割」として基本計画では以下のように規定している。

- ◇ 「世界都市さっぽろ、集客交流都市さっぽろにふさわしい文化芸術振興の拠点になることはもとより、様々な市民が集い、交流し、札幌の魅力を国内外に積極的に発信していく場」として位置付け、高機能ホールを持つ文化芸術振興の拠点としての役割を担っていく。
- ◇ 文化芸術活動の支援、次代の担い手の育成、文化芸術と異業種・異業界との協働・交流の推進などを通じて、札幌全体の文化芸術を支え、育てていく役割を担っていく。
- ◇ 創造都市さっぽろの理念を具現化する拠点として、芸術文化とIT、観光、ビジネスなど様々な分野の連携と活性化を図っていく。
- ◇ そして、施設整備の基本方針として
 - ・ 高機能ホールの整備
 - ・ 札幌市民ホール(代替施設)の活用
 - ・ (仮称)アートサポートセンターの設置検討
 - ・ (仮称)創造活動センターの設置検討

が提起された。整備基本計画では、市内の大規模ホールの適切な役割分担の立場から3館体制を維持し、老朽化した芸術文化の館の機能を受け継ぐ高機能ホールの設置と市民ホールを継続活用することとした。

市民交流複合施設が、その位置付けとおり「創造都市さっぽろ」にふさわしい芸術文化振興の拠点として、また、多くの市民が集う素晴らしい空間となることを強く願っている。これらの役割を評価してきた我々として、いくつかの疑問点の指摘と提言を行いたい。

【高機能ホールについて】

この整備基本計画を読む限り、かつての『多目的ホール』を想起せざるを得ない。

1970年代に始まる『多目的ホール』の建設ラッシュは、文化面における高度成長時代の象徴とも言えよう。そこには、待望のその地域初の劇場実現への夢を乗せ、様々なジャンルの様々な期待が満載された。設営、運営する側(ほとんどが自治体)としては善意からの受け入れに努力したと評価すべきであった。それこそコンサートもバレエもオペラも演劇も歌舞伎も演歌、ロックコンサートも実現できる“劇場”を目指した努力に対して。

しかし、完成後数年も経ずしてそれぞれの利用団体から様々な批判を呼び起こし、巨額の予算を投じながら『無目的ホール』との侮蔑的表現をいただく結果となった。

だからこそ、この経験を教訓として90年代以降、コンサートホール、室内楽ホール、音楽劇場(オペラ、バレエなどを中心とする)、演劇劇場などが個別に誕生することとなる。

札幌市民の様々な期待、要求を考えると、あれも実現したい、これも組み込むことにしたいということはもちろん理解しなければならない。ただそうした善意の配慮が再び同じ轍を踏むことになっては、何とも歴史を学習していないとの批判を免れないだろう。

『高機能ホール』という表現は、この『多目的ホール』の反省の上に立っていると答えられるのかもしれない。では一体何が違うのか、果たしてこの新劇場で芸術振興を目的とした劇場らしい高度なオペラ・バレエ等の本格的公演が保証されるのであろうか？

高機能ホールのキャパシティーを芸術文化の館の機能を維持する立場から2300席としているが、検討委員会提言、基本計画では採算性も考慮に入れて2000席としていた。また、検討委員会の議論の中では、良好な鑑賞環境を確保するためには、舞台から客席奥までの距離を35m以内として、席数を2000席としていた。今回のキャパが、公演の採算性、貸館利用率の向上などの立場からの設定と思われるが、キタラを見ても、良好な鑑賞環境を確保することがホールの存在を規定するもので、そうした評価が結果として利用率の向上にもつながると考える。そうした意味でも、2300席の定員には疑問を感じる。

提言① そのキャパシティーについてである。2300席が悪いのではなく、それだけの大勢の集客を見込める出し物とはどんな分野であろうか？と考える。市民の税金を多額に計上する以上、まず公的な意義が不可欠と考えるが、商業的公演ぐらいしか思い浮かばない。果たして行政の計画としてそうした考え方が優先されるのは如何なものであろうか？2000名を超える大聴衆を集める会場は、各種コンベンションホール、客席を備えた体育館、球場、野外劇場などが整備されてきた。あの“多目的ホール”の時代とは劇場環境が違ってきていることを考慮した優先順位があってしかるべきである。

その座席数が確保される広さがあるならば、日本の大劇場の平均的座席数2000席に留め、余裕分を舞台空間に回す、あるいは座席間隔を広げ余裕のある鑑賞を楽しんでもらうべきだろう。2300席のお客様を満足させるには、PA装置を借りた音響でしか公演は不可能。逆にPAを使うならば、体育館でも野外コンサートでも基本的には同じ音響を作ることは可能なのである。単に座席数の多さを要求する一部の商業的公演のためにキャパを決めるのは、大都市札幌という公共団体の責務であろうか？ぜひ全国の類似の劇場の実態を調査していただきたい。

提言② 新たな提案として、劇場空間をその演目によって観客数が違ってくことを考慮した可変式壁面の設置を要望したい。札幌ではまだまだ1000席を超える公演(札幌を除く)は簡単ではない。それを、1000席、1500席、2000席などに可変できる観客席にすることによって、多様な公演(演劇などにも)に挑戦でき

る環境ができる。劇場利用率も高まるだろう。“新”劇場で公演を企画したいと望む団体は多いはずだから。すなわち2000席を埋めるのは難しい(まして2300席など)が、可変設備を使えるならば“満員”のお客様の前で存分に力を発揮する喜びが待っている。実例は国内にもある。ただその場合、音響設計には特段の努力をお願いしたい。

提言③ 舞台機構の設計には日本の英知を結集して欲しいということである。未だ日本の劇場設計には多くの企業参加があるとは思えない。しかし、だからこそ一企業に偏った判断は禍根を残す。開かれた議論の中で今望みうる最善の選択方法を採用すべきである。独善的選択はすべきでない。広く開かれた議論の中で業者選定を行って欲しい。とりわけ、舞台装置の設計には広く専門的知識を求めるべきである。『公共劇場舞台技術者連絡会』という組織をご存知であろうか？まさに理想的な公共劇場のあり方、そこで制作される作品創造の提言まで研究対象を広げ、志のある優秀な専門家集団である。そこに結集する全国20施設こそ、現状のトップを走る劇場であり、札幌が学ぶべきノウハウの宝庫かもしれない。そうした専門家と、札幌の劇場関係者、アーティスト、そして劇場建設に関心を持つ市民が広く語り合う場も必要条件と考える。

ACFとして、舞台機構に盛り込むべき課題を別紙のとおりまとめた。ぜひ、参考にさせていただきたい。

提言④ 多面舞台の具体的保証である。当初四面舞台の見取り図が我々の前に示された。しかしあっけなくそれが二面舞台に格下げされている。確かに国内では四面舞台が有効に機能している例は少ないが、だからといって日本の最も新しい舞台が二面で十分というのには飛躍がないか？必ずしも面数にこだわるものではないが、これも国内の英知を結集して議論して欲しい。一説には、『二面といってもその背後に十分なスペースを取ってある』と聞く。では一体どれだけの面積が予定されるのか、具体的に公にすべきである。

提言⑤ これだけの劇場建設に踏み切る以上、そこでどんな作品が展開されようとするのか、抽象的な表現はあっても、札幌市が主体的に作品創造に対する責務が明確ではない。佛作って魂入れず、言い古された表現を持ち出すことは悲しい。せめて国内の第一線で創造活動に携わっているアーティストと、北海道の創造団体などを交え、大きな議論の中で劇場のソフト制作の方向を示すべきである。

もうひとつ、劇場の使用目的を市民に広く平等になどと、過去の“公の施設”を想起させる悪弊を繰り返さないで欲しい。劇場法が成立した現在、杞憂ならば幸いであるが、全国の先輩劇場に学びつつ芸術創造の拠点として、新時代のパイオニアの気概を持って運営方針を英知を集めて練り上げて欲しいと願う。この劇場

こそ北海道で初めての高機能劇場であるならば、この劇場にふさわしい公演が主役になるように運営方針に明確な哲学こそ必須である。

【アートセンターについて】

基本計画におけるアートサポートセンターから、より幅広い役割を担うアートセンターへの衣替えは、大いに歓迎するものである。アートセンターは、札幌の芸術文化を支え育て、いっそう推進する拠点としての役割を担うことになる。そして、市民交流複合施設における、芸術文化を活用した「賑わい」を創出することも求められている。アートセンターの設置に向けて、以下の課題について早急に検討することを提言する。

提言① 整備基本計画での位置づけを見ると、市民交流複合施設における芸術文化の発信・創造拠点として中心的役割を担うことになるが、その要は運営体制にある。整備基本計画では、その姿が見えてこない。同時に、その機能を実現するためには、地元のアーティスト、文化団体の協力が不可欠であり、それを取りまとめるマネジメント機能が求められている。早急にアートセンターの準備組織を立ち上げ、議論すべきと考える。

提言② 整備基本計画では、アートセンターが新たにリノベーション事業などの地域再生、創造都市札幌の理念を具現化する地域創造の取り組みが盛り込まれている。これらの課題は、本来的には創造活動センターが担うべき課題と思うが、後に述べる図書館機能やメディアアーツ部会との連携によって、芸術文化を通じた新たな価値を生み出す取り組みを進める必要がある。

提言③ 芸術文化施策の調査・研究の取り組みが明記されているが、活動支援の取り組みを含め、それらを評価し、施策化するカウンスル機能が無ければ活かされないものと思う。現在、文化芸術基本計画検討委員会が設置されている。札幌でのアーツカウンスルの設置に向けた検討をお願いしたい。

【図書館機能について】

整備基本計画で、市民交流複合施設に新たに図書館の設置されることになった。市民交流施設検討委員会の中でも、創造活動センターの議論に併せてイギリスのアイディアストアや仙台メディアテークなどの議論があったと聞く。整備基本計画では、都心にふさわしい図書館として、札幌の魅力や街の情報、ビジネスや様々な課題解決に役立つ情報を提供する「都市の知的空間」と位置づけている。図書館設置に向けて、これまでの図書館の形態・機能にとらわれることなく、以下の機能を盛り込んでいただきたい。

提言① これまでの図書館にとらわれることなく、アートセンターとも連携し、

その機能を「最先端の知と文化の提供」に置き、様々な記憶媒体(メディア)による情報提供が望ましいと考える。その理由として、札幌はユネスコの創造都市ネットワークにメディアアート部門で申請している。その活動拠点としてメディアアート部会があり、そうした活動と連携することで、新たなビジネストレンドを提供することができると思う。

提言② いずれにしても、創造活動センターが担うべき役割を、図書館機能で補完することには無理がある。整備基本計画の最後まで触れているように、メディアアート部会やアートセンターとも連携し、創造都市戦略を具現化する体制の構築が必要と考える。

【施設全体を通して】

提言① 市民交流複合施設が、創造都市さっぽろの理念を具現化する拠点として、創造活動センターの役割が重要であり、特に創造活動センターはこの拠点であり、札幌芸術資産活用の戦略中枢でもありかつ上位概念である。この具体的検討なくして整備基本計画はあり得ないのではと考える。このことについて57Pに記しているようなことではないと断言する。アート・サポートセンターについてアートセンターへ変革し、より広い範囲を述べられており整備目標としては期待できる内容となっていたが、具体的運営方法については人材育成が少し述べられているに過ぎない。「創造都市さっぽろ」をどのような姿にしていくのか、そのための戦略拠点としての創造活動センターとアートセンター、図書館構想、そして高機能ホールとどうつなぐのか、国際芸術祭の実行委員会も立ち上がっており、人材育成はの中で一部育成を担うと考えると早急にこの役割や新たな価値創造の考えを具体化する検討委員会の設置の必要を提言したい。

提言② 創造都市さっぽろの概念のなかに、「芸術文化とIT、観光、ビジネスなど様々な分野の連携と活性化を図っていく」と考えられてきたが、この拠点となるべく複合施設内の各施設においても連携して新たな価値創造を目指す方向が描かれていない。まして街中図書館機能が加えられており、ますますこれらのコラボレーションが重要になってくるのではないか。また、既存の施設においても役割分担のイメージが描かれてなく、再活用(リノベーション)の考え方を明確にして当面できるコラボレーションと創造活動センターの検討に考えをゆだねることについて明記する必要がある。あわせて、札幌市内のある芸術資産はもとより、札幌は北海道における消費基地でもあり、札幌は北海道の拠点となるべく方向にあることは言うまでもない。したがってこの施設に求められる役割も当然北海道全体をどう巻き込んでいくべきか言及することは言うまでもない。